# 日本兵の沖縄戦記
## 「夢も結ばず」 中

前回に引き続き、要塞建築勤務第6中隊(以下、第6中隊)に所属していた長尾綱義さんの手記をひも解きます。今回は嘉手納での戦争準備に入った第6中隊が北部へ移動し、恩納村に入った時の体験をみていきます。

**【十・十空襲】**

1944年10月10日、米軍機による南西諸島空襲、いわゆる十・十空襲で県内各地が大きな被害を受けました。日記にも「空しゅう受ける、敵米の空しうはっきり目撃す 朝7時より5時迄空しゅう」という緊迫した記述が出てきます。10月10日の第6中隊の陣中日誌では、長尾さんが所属する小隊の樋渡小隊長に中隊長から周辺の退避壕に兵士を避難させる命令が出されていたことが書かれており、極めて危険な状況だった様子がうかがえます。空襲翌日の手記の記述には「防空壕掘り 今日はあらしの跡の様だ」とあり、避難していた壕や周辺の処理にあたっていたことがわかります。

この空襲のあとも中飛行場での44飛行場大隊関連の兵舎、事務所、慰安所などの建設、道路整備を米軍の上陸前空襲直前まですすめていました。一方で断続的に空襲を受け、3月1日には「朝7時半より大空襲あり 10機又20機と大空襲5時半頃まで損害なし 10月10日より敵機多し」とあり、約3週間あとに迫る上陸前空襲を予期させます。また、この時期から制海権、制空権を失い、海上輸送による補給も途絶えていました。

**【沖縄戦始まる】**

1945年3月23日、米軍による沖縄全域への空襲が開始、翌日には艦砲射撃も始まります。

「空襲朝より夕方迄」(23日)、「6時より大空襲」(24日)、「空襲増々大なり」(25日)、「間断無く艦砲は続く」(26日)、「前日より増々はげしくなり砲撃急なり」(27日)、「今日も増々、空、艦、両砲撃急なり」(28日)、「昨夜より移動準備に多忙一眠りもせず、朝四時に北方向に向いて我が隊は移動開始」(29日)と、23日から29日の6日間は空襲、艦砲射撃の激しさが記されています。この米軍の猛攻を受け、ついに第6中隊は中飛行場をあとにし、北へ向かっていきました。

**【北部へ】**

4月1日の米軍上陸をうけ午前2時に倉敷方面に出発します。翌2日、第6中隊は倉敷(沖縄市)から兼箇段(うるま市)、そして翌3日には池原(沖縄市)に来ます。移動中ほとんど食事がとれず、寝る事もできない中、移動途中で米軍と交戦し、負傷することなく、何とか石川まで来ることができました。

石川岳から望む恩納岳(左側)

石川では既に米軍が陣地構築を始めており、「戦死者4名」を発見する中、「敵の目はさけて」山中で一晩をすごします。そして4月13日目にやっと恩納岳に入ることができ、上官の班長、分隊長に合流することができました。「腹のすいたのに何より体が疲れ、12日も喰わず体は綿の如く疲れている」という記述から、やっとの思いで恩納岳に辿りついた様子がわかります。この日はそのまま恩納岳で寝る事になりますが、「寒さにふるえなが